

## ソーシャルクリニックが目指す 地域のエンパワメント

北海道教育大学函館校 地域協働推進センター  
センター長 齋藤 征人

ソーシャルクリニック(SC)とは、地域課題の診療所のような存在をイメージした本校オリジナルの地域と大学との協働モデルです。大学や学生と共に地域課題の把握や調査、対応、解決方法などについて模索し解決・改善を目指す「過程」と言っているのだからと思います。地域と大学との関係についての新しいカタチを模索する中で、このモデルを提唱し、地域の大学の「生き方」「歩み方」を示してくださった諸先輩方に、まずもって感謝したいと思います。

私にとりまして、SC活動を具現化した取り組みは、なんとといっても江差町における「まちづくりカフェ」です。2015年から江差町役場の地域包括支援センターのメンバーとの協働で始まったこの取り組みは、少子高齢化に伴って、多様化する住民の地域生活上のニーズに今後行政サービス等の「公助」が十分にこたえられなくなることが懸念されることから、地域住民の支え合い等を含めた生活支援体制を整備しようとするものです。つまり、まちづくりといっても「福祉のまちづくり」がその主眼にあります。

地域の生活支援体制整備といえば、当然高齢者の地域生活をどう支援するかにフォーカスが当てられがちですが、高齢者が暮らしやすいまちは障害のある人や子どもたち、外国人など多様な特性をもつ住民にとっても暮らしやすいはず。「地域共生社会」づくりが時代の要請となり、誰もが安心して暮らし続けられる地域を、地域住民の力を結集してつくっていくことが求められています。ですから、まちづくりカフェでは開始当初から高齢者だけに着目するのではなく、現役世代や子どもたちも含めて、地域暮らしのちょっとした困りごとやあったらいいなと思うことを、最初からできるだけ行政に頼るのではなく、自分たちの工夫によって解決することを目指しました。参加者は、町内会の役員さんや民生委員さん、老人クラブといったメンバーだけに限らず、中高校生から、大学生、現役世代、シニア世代と多様で、ときには他町の見学者も仲間に入って議論しました。楽しそうな議論の様子が魅力的に映ったのか、現在道内3カ所以上で同様の試みが始まっています。

話し合いのテーマは参加者が決めます。昔ながらのものづくりを伝承していこうというチームや、地域食堂の立ち上げについて話し合うチーム、健康づくりに定期的にラジオ体操をしながら町内の困りごとの相談に乗るチームなど、現在5つの多彩なチームが活動しています。そしていずれのチームも、ただ話し合うだけでなく、実際に試行するまでに至っているのが特長です。異なる世代の住民同士が、自分たちが設定した共通の課題に取り組むことで絆が深まります。今まで知らなかった住民同士が、親しげにあいさつを交わすようになることは、たとえささやかでも大

きな成果です。

「行政に頼らずに」というのは、決して行政の責任を免除する意図ではありません。より重い支援が必要な方のもとへ、専門的な支援やそのための財源を捻出するために、地域でできることは地域でという狙いです。果たしてそんなことができるのでしょうか。地域住民が主体的になり、地域がその持てる力を解放(エンパワメント)すればできることは無限であるはずですが。その確信の源泉は、私が函館校に赴任する前に体験した、帯広での廃校跡施設を活用した地域コミュニティの拠点づくりにあります。

東日本大震災があった年の3月、それまでの仕事を辞め、思いがけず地域福祉の現場に飛び込むことになりました。任されたのは廃校跡施設の活用。それも地域の支え合い体制づくりの拠点にするというプロジェクトでした。旧校区の住民に「地域の生活ニーズ調査」の調査員として聞き取りに回ると、さまざまな困りごとが聞こえてくるのでした。雪捨て場に困っているという住民に、近くに頼れる人がいないか聞くと、自宅裏に息子さんがいるとのこと。「だったら心配ありませんね」と思わず口にしたのですが「息子だから頼めないのよ。彼らには彼らの生活があるんだから」と息子さんを思う親心を聞きました。地域のことを自分はさっぱりわかっていなかったと反省させられました。

同じくらい強烈な印象だったのが、住民たちの持つパワーの大きさでした。廃校跡施設に多様な人集ってもらおうとキッズスペースを構想したものの予算がありません。「作ってやろうか？」と作業を買って出てくれたのは、廃校裏にお住いの大工のご隠居さん。1週間ほどで見事なキッズスペースが完成したのでした。その後、そこには親子連れの姿が頻繁に見られるようになったのでした。同様のエピソードは挙げればきりがありません。

住民たちはたくさんの力を持っているのにそれを発揮できる機会と場がないのではないか。活躍の舞台を用意できれば、住民たちは存分にその得意な力を発揮して、地域を暮らしやすくする力があるのではないか。やがて「地域住民のエンパワメントをお手伝いすること」が自分の役割だと思えるようになりました。

話を元に戻しましょう。まちづくりカフェの究極の目標は「地域共生社会」づくりといえます。それは、子どもも大人も、障がいのある人も主婦も、誰にでもできることだと思えます。自分のできることで誰かのためになること。それを実感できる地域社会にすること。たとえ自分が不得意なことでも誰かにとっては得意で、何かのついでにできることかもしれない。その逆もまた然り。このように支え合える可能性を拡げるものは「多様性」ではないでしょうか。地域をエンパワメントするSC活動をはじめとして、国際的な視点化から地域づくりを模索する函館校の教育研究や、今後の地域社会の発展にささやかながら役に立てる点が、ここにあるのではないかと感じています。